

森の民話茶屋通信 Vol.6

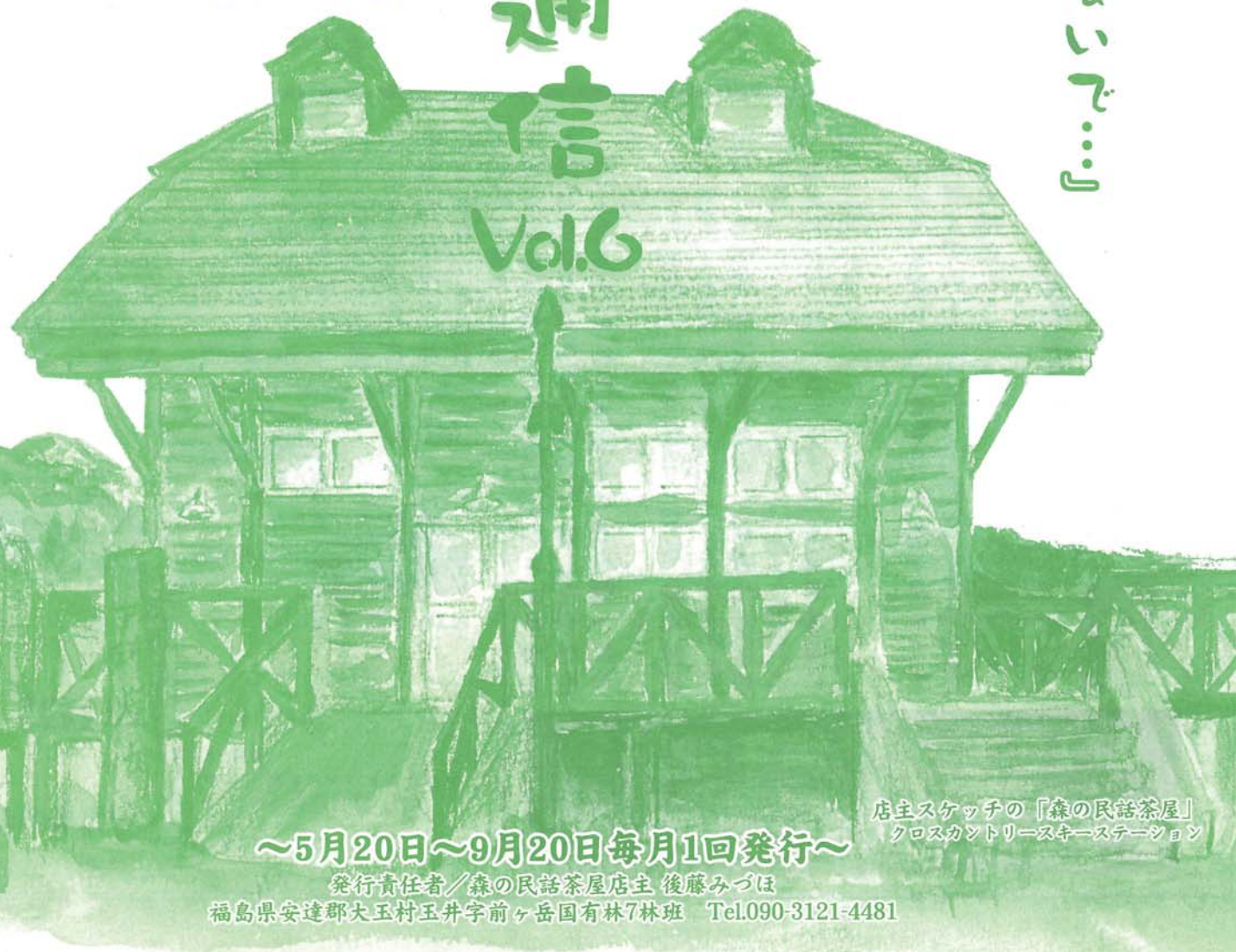
福島県地域づくりサポーター事業
『ふるさと民話とふるさと森をつなぐ...』



オープン最初のお客様。



開店準備のメンバー。



店主スケッチの「森の民話茶屋」
クロスカントリースキーステーション

～5月20日～9月20日毎月1回発行～

発行責任者／森の民話茶屋店主 後藤みづほ

福島県安達郡大玉村玉井字前ヶ岳国有林7林班 Tel.090-3121-4481

店主が走る！村のオウチ Vol.5 五月に開館した「あだたら高原美術館 青-a0-」に渡辺武郎さん(62才)・永子さん(57才)を訪ねて



そこは本当に素敵な美術館でした。

三十八年間の中学校の美術教師を務めた渡辺武郎さんと県立聾学校の教師が長かった渡辺永子さんご夫妻が退職を機にここ二本松馬場平、と言っても大玉村から一歩の閑静な木立の中に自宅兼美術館を開館されたのを新聞で知って早速五月十一日訪ねました。

県道沿いに建った看板「青-a0-」を入ると、芽吹きの季節の「ミズナラ」の林に囲まれた車寄せが。目の前の建物自体が何とも魅力的な美術館です。開館祝いの花々が芸術家らしいセンスに溢れて配置されていて、その数の多さは又、お二人が沢山の友人たちに愛されていることを物語って余りあるものでした。

「混み合うから開館直後の時間にどうぞ」と二日前にインタビューのアポイントを取った私に永子さんが話されていたので十時を一寸回った時間、もしかして今日の一人目の客だったのでしょうか。でも展示室に入り最初の作品の前で息をのんで入っていると、すぐ私の後にお客様、続いて又三人連れのお客様が入館して

「青」は可能性を持った未知の世界の色、そして安達太良の空の色

てきました。

それにしても、迫力と静かさのある作品の数々は美術館の開館を記念したご夫妻の作品でした。高い天井、大きく切られた全面の窓から溢れるように柔らかな新緑が光輝いて、空気を清く立体的なままに現代を告発するかのような大作のモダンアートは武郎さんの作品。極端に色を抑えた版画の大作は、人間の存在そのものを問いかけるかのような永子さんの作品。お二人とも数々の展覧会で受賞されている実力派です。自然を取り込んだ空間に展示されているから尚一層、お二人の作品が輝き、観る人の感受性に向かって熱くメッセージを発して圧倒されます。

階段を下りると常設展示室があり、お二人の若い時の作品や、県内の若手の作家の作品が並んでいます。その階段の踊り場の脇に木の香りが残る喫茶室があり、そこから先述の新緑の「ミズナラ」と「クヌギ」がはつとすると美しく硝子越しに見えています。

Q／開館おめでとうございます。忙しかったのでしょうか？

武郎さん(以下・武)／いやあ、開館後毎日百名もの方とそれにマスコミ、新聞やテレビ局の取材と本当に

くたびれました。

Q／素晴らしい美術館ですね。

武／お陰様で、岳温泉の人たちも喜んでくれて、温泉から回遊する文化的な場ができたと言われました。

Q／お二人のご出身は？

武／僕は安達郡の岩代町。

永子さん(以下・永)／私は同じく東和町です。

Q／「青-a0-」という名前にはどんな意味が？

永／貴方からどうぞ。(そう言いながら美味しいお茶を入れて下さる)

武／娘が付けたんですよ。「青」は「青春」とか「青年」とか「若い山脈」とか未知なる世界への可能性を感じられますよね。そして安達太良山の空の色も。

Q／今日も空がとても美しいですね。(五月晴れの日でした)

永／開館が五月三日でしたが、そこあら一斉に芽吹きが始まって緑が又きれい。

Q／私たちもこの安達太良山の恵みを味わって頂きたいとの気持ちで、昨年から「森の民話茶屋」を始めましたんですよ。(昨年発行の「森の民話茶屋通信」を第五号までを示しながら)森の中には様々な緑がある...と言う意味を込めて全部違う緑で印刷して

いるんです。

武／そうですね。

Q／お二人とも教育者として長く子どもたちに関わってきて、現在(いま)の子どもたちをどう思いますか？

武／十年単位で変化してきているように思います。絵を描くこと、制作することに粘りがなく、結果を急ぎすぎるし、クラスみんなの評価をひどく気にする。もつとも忍耐などということをしなくとも何でも簡単に手に入る時代です。

Q／「教える」という行為は、違うエネルギーのような気がするのですが...

永／そうですね。私は大学を出て教師になって十年間は絵を描かなかったの。でも再び作品を描きたい...と思うようになったのは、聾学校の生徒たちが言葉で表現出来ないものを一生懸命絵で表現するのに触発されたからなのね。

Q／障害のある子どもたちの教育が長いのですか？

永／教員生活の内、二十一年間はそうでした。楽しいのよ。発達が目に見えるの。

Q／私も知的障害を持っています。人たちと一緒に演劇をしたりしていますが、私たちの方がエネルギーを

貰うことが多いです。

常設展示室の方に飾ってあった「書く」という絵は凄いですね。

武／私の三十年前の作品です。

Q／あの絵は自分を肯定し続けたいと描けないと思ふんですが。でもあの絵からは当時の社会の有り様に対する若者たちの否定の声の土台にあるような...

武／そうですね。否定しながらそんな自分を肯定し続けていますね。

Q／圧倒される力ですね。

永／生き方と夢がそのままこの美術館に表現されていて素晴らしいですね。

永／ここを、発表したくても場所がない、多くの若手美術家の発表の場に使って欲しいし、交流の場になれば...と思います。

Q／どのぐらいの展示期間にするのですか？

武／二週間ごとに入れ替えていきますが、年内はもう一日の空きも無く埋まっています。来年も埋まり始まっていますね。

Q／それだけ多くの人が待ち望んでいたんですね。良かったですね。

玄関まで見送って下さったご夫婦に、翌々日に森の民話茶屋で「馬鉄洗いの日」に因んだ「ばだもち」を作る話をし、必ず「ばだもち」を届ける約束を。そして「馬鉄洗いの日」の説明を知ったかぶりでもしきり...すっかりお二人との出会いが嬉しい店主でした。みなさんも是非「あだたら高原美術館 青-a0-」に足を運んで、素敵な人と素敵な人と素敵な人と世界に出会って下さい。

安達太良登山の帰りは、森の民話茶屋のだんご汁が待ってるよ!!
5/20・27(日)
100%大玉村の小麦粉です!



“多様性がキラリと光る舞台に...” 「森の民話茶屋」今年も始めました。

例年にならない大雪と厳しい寒さの冬でした。こんな年は決まって豊作だという人と「巳年はどうも...」と心配顔の古老もいますが、豊作を願わずにはいられません。そんな訳で、当然の様に「桜の開花は遅いもの」と思い込んでおりましたのに、逆に一週間以上も早く咲きました。自然界の不思議さを改めて知らされたような春でした。

「森の民話茶屋」は、お陰さまで今年も開店することが出来ました。

昨年は七月十六日から十月八日までの日曜日、県内は勿論、遠く名古屋や岩手、新潟などの各地から、様々な年代の約七百名もの方のおもてなしをすることが出来ました。これも県及び村当局のご理解とご指導の賜物であり、茶屋を愛して下さったお客さまの力だと深く感謝している所です。今年も、四月末から始まる大型連休に間に合うよう「森の民話茶屋」を開店させたいと思いつく準備を進めて参りました。そんな私たちに、安達太良連峰の中腹にある「茶屋」周辺では、丁度桜が満開の時期に当たり、その桜を眺めながらの作業は実に心地よく、胸はずむ思いで予定通り四月二十九日、開店することが出来ました。

それにしても茶屋周辺は「お花見の穴場」だと改めて実感しました。実に静かで周辺の山々の芽吹き始めた木々と、その生命力を競うような見事な桜花の満開でした。

桜は、「森の民話茶屋」オープンを見届けて花びらが散り、もうすっかり柔らかな緑に包まれています。

二十一世紀の幕が明け、あらゆる分野で新しい形が出来はじめ、新しい多様な生き方が生まれています。このGWを前にして、ある新聞の社説が目に残りました。それは「多様性がキラリと光る舞台に」という見出しでした。このGW中に海外や国内を旅行する国民の数は約二千七百万人。しかし、この経済情勢の中で、行楽一辺倒の大型連休は終わり、自らの力を再開する傾向が強くなった



集

ア

ツ

+

ス



4月29日。
オープン
セレモニーで、
村長を迎えて
“餅まき”



それっ！ひろっ！

地場産品も格安に！



川越市の笑顔の御一家。
フォレストパーク
あだたらの帰り。



いよいよオープン！

とレジャー白書が分析しているとありました。「自らの志を輝かせる舞台に立つ」というGWの過ごし方を提案しているものでした。

私たちは開店の準備に追われながら、大型のテーマパークなどに程遠く、だからこそ「森の民話茶屋」なのだと思いつけられた。個性あふれる思いでした。個性あふれる人々の多様な価値の中に、森の静かさと豊かさと遠い昔からの民話を味わい、楽しむ方々を一人でも多くお迎え出来ることを願ったのでした。

今年も県及び村のご理解を頂き、特に村当局にはデッキ床の張り替え、入り口を引き戸に、内部の床の新たな塗装など、この建物自体が生き返ったようになりました。深く感謝し、一層大切に活用していくことを運営委員一同考えています。

今年も毎週日曜日と祝日、午前10時から午後四時までのオープンです。是非、ご来店の上、交流の場にして下さい。

平成十三年五月吉日

店主敬白



6/10(日)は旧端午の節句
端午の節句といえど...
チマキでしょう!!この日食べます!



GIオおばあちゃんを交えて。



添田さんのほだもずを味わう。

大玉の
仕事人
第一弾!

寄せ豆腐に舌鼓

大玉 森の民話茶屋でイベント

安達郡大玉村玉井字前ケニガリを打っている間に、森の民話茶屋(後藤みづほ店主)のオープニングイベント「手づくりあじふ寄せ豆腐」は、三十日、同村で行われた。同村在住の渡辺初治さん(五三)が、大玉村産の大豆と安達太良山の自然水を使う「寄せ豆腐」づくりを披露。舌鼓を打っていた。



寄せ豆腐を振る舞う渡辺さん

福島民友五月一日掲載